

今西祐行「一つの花」 (昭和51年)

「一つだけちょうだい」

これがゆみ子のはっきり覚えた、最初のことばでした。まだ戦争のはげしかったころのことです。そのころは、おまんじゅうだの、キャラメルだの、チョコレートだの、そんな物は、どこへ行ってありませんでした。おやつどころではありませんでした。食べる物といえば、お米のかわりに配給される、おイモや、マメや、カボチャしかありませんでした。

毎日、てきの飛行機が飛んできて、ばくだんを落とっていました。

町は、つぎつぎに焼かれて、灰になっていきました。

ゆみ子はいっもおなかをすかしていたのでしょうか。ご飯のときでも、おやつするときでも、もつと、もつとと言って、いくらでもほしがるのでした。

すると、ゆみ子のお母さんは、

「じゃあね、一つだけよ」

と言って、自分の分から一つ、ゆみ子に分けてくれるのでした。

「一つだけ……。一つだけ……」

と、これが、お母さんの口ぐせになってしまいました。ゆみ子は知らず知らずのうちに、お母さんの、この口ぐせを覚えてしまったのです。

「なんてかわいいそうな子でしょうね。一つだけちょうだいと言えば、なんでももらええると思ってるね」

あるとき、お母さんが言いました。

すると、お父さんが、深いため息をついて言いました。

「この子は一生、みんなちょうだい、山ほどちょうだいと言って、両手を出すことを知らずにごすかもしれないね。一つだけのイモ、一つだけのにぎり飯、一つだけのカボチャのにつけ……。みんな一つだけ。一つだけの喜び。いや、喜びなんて、一つだってもらえないかもしれないんだね。いつか、大きくなって、どんな子に育つだろう？」

そんなとき、お父さんは決まって、ゆみ子をめちやくちやに高い高いするのです。

それから、まもなく、あまりじょうぶでないゆみ子のお父さんも、戦争に行かなければならない日かやりました。

お父さんが戦争に行く日、ゆみ子は、お母さんにおおわかれて、遠い汽車の駅まで、送っていきましました。頭には、お母さんの作ってくれた、わた入れの防空ずきんをかぶっていました。

お母さんのかたにかかっているかばんには、包帯、お薬、配給のきつぷ、そして、大事なお米で作った、おにぎりがはいっていました。

ゆみ子はおにぎりがはいっているのをちゃあんと知っていましたので、

「一つだけちょうだい。おにぎり一つだけちょうだい」

と言って、駅に着くまでにみんな食べてしまいました。お母さんは、戦争に行くお父さんに、ゆみ子のなき顔を見せたくなかったのでしょうか。

駅にはほかに戦争に行く人があって、人ごみの中から、ときどき、バンザイの声が起こりました。また別のほうからは、たえず勇ましい軍歌が聞こえてきました。

ゆみ子とお母さんのほかに見送りのないお父さんは、プラット・ホームのはしのほうで、ゆみ子を抱いて、そんなバンザイや軍歌の声に合わせて、小さくバンザイをしたり、歌を歌っていたりしていました。まるで戦争になんか行く人ではないかのよう……。ところが、いよいよ汽車がはいってくるとうきよときよになって、またゆみ子の「一つだけちょうだい」が始まったのです。

「みんなおやりよ、母さん。おにぎりを……」

お父さんが言いました。

「ええ、もう食べちゃったんです……。ゆみちゃんいいわねえ、お父ちゃん兵隊ちゃんになるんだって、バンザイして……」

お母さんはそう言って、ゆみ子をあやしましたが、ゆみ子はとうとうなきだしてしまいました。

「一つだけ、一つだけ」

と言って。

お母さんが、ゆみ子をいっしょうけんめいあやしているうちに、お父さんが、ぶいといなくなってしまう。

お父さんは、プラット・ホームのはしっぽの、ごみすて場のような所にわすれられたようにさいていた、コスモスの花を見つけたのです。あわてて帰ってきたお父さんの手には、一輪のコスモスの花がありました。

「ゆみ。さあ一つだけあげよう。一つだけのお花、大事にするんだよ……」

ゆみ子は、お父さんに花をもらおうと、キャッキヤット、足をばたつかせて喜びました。お父さんは、それを見て、にっこりわらうと、何も言わずに汽車に乗っていつてしまいました。ゆみ子のにぎっている一つの花を見つめながら……。

それから、十年の年月がすぎました。

ゆみ子はお父さんの顔を覚えていません。自分にお父さんがあったことも、あるいは知らないのかもしれない。でも、今、ゆみ子のとんとんぶきの小さな家は、コスモスの花でいっぱい包まれています。

そこからミシンの音が、たえず速くなったたりおそくなったたり、まるで何かお話をしているかのよう聞こえてきます。それはあのお母さんでしょうか。

「母さん、お肉とお魚と、どっちがいいの？」

と、ゆみ子の高い声が、コスモスの中から聞こえてきました。

すると、ミシンの音がしばらくやみました。

やがて、ミシンの音がまたいそがしく始まったとき、買い物かごをさげたゆみ子が、スキップをしながらコスモスのトンネルをくぐって出てきました。そして、町のほうへ行きました。

きょうは日曜日、ゆみ子が、小さなお母さんになって、おひるを作る日です。